

The book cover features a central red rectangular panel. The top and bottom borders are decorated with a repeating geometric pattern of interlocking 'Y' shapes in blue, red, and green. The left and right borders are decorated with a floral pattern of red and white flowers with green leaves on a blue background. The central red panel contains the title and author's name in black Japanese calligraphy.

安永明子

持統女帝秘抄

秀英出版

安永明子
持統女帝秘抄

秀英出版

持統女帝秘抄

昭和六十年十二月五日 初版印刷
昭和六十年十二月十日 初版発行

定価 一、三〇〇円

著者 安永明子

株式会社 秀英出版

発行者 金森良之

東京都新宿区納戸町四〇郵便番号一六二
振替口座東京二一一一九七三九
電話〇三―二六〇―五二八一(代表)

印刷・製本 KMS

目次

持統女帝秘抄

第一部 吉野黎明

五

第二部 皇后春秋

六

第三部 天の香具山

二〇五

第四部 夢幻泡影

三六

持統女帝秘抄

題字 安永典文

第一部 吉野黎明

一

吉野の山々は、闇ひといろ一色の中にあつた。

闇は、鶺鴒うのを怯おびえさせた。吉野へ来て、はや半年以上にもなるといふのに、鶺鴒はいつこうに闇に馴れなかつた。

——星月夜でもなければ、闇が訪れるのは当たり前のことなのに、なぜ私は闇を怕おそれるのだらうか。

鶺鴒は自分が不甲斐なく、幾度も自分を励ますために呟つぶやきもした。それでも、鶺鴒は闇に馴じめなかつた。

倭やまとの古京でも、近江の京でも、むろん闇の夜はあつた。が、宮中の奥深くに起き伏しする身に

は、夜の闇は縁のないものであった。室内は燭台の灯に照らされて明るく、侍女達のさざめく声
が賑やかであった。闇は、黒い帳とばりを宮中の周囲まわりに垂れこめているにすぎず、夜になったことを示
すだけで、恐ろしくも、おどろおどろしいものでもなかった。

しかし、吉野の闇は、それ自身、意志と力をもつ生き物のように鵜野を怯やかした。闇の沈黙
は、得体の知れない不安と恐怖をもって、じりじりと鵜野を囲繞いぎょうした。

——鵜野よ、そなたはいったい、なぜそれほど怯え怕れるのか。半年前のあの力強い未来への
展望と自信を、そなたはどこへやってしまったのか。

闇が迫るたびに、鵜野は自ら詰問した。

——そんなものは、始めからありはしなかったのだ。私は無理な幻想を描いて、夫の大海人おおあまに
従したがってきただけなのだ……。

——いや、そうではあるまい。父天智帝てんちと、夫大海人皇子の衝突を、それが天下の動乱となる
かもしれないとさえ、どこかで予見しながら、そなたは父を捨て、夫を信じ、夫に賭けて、未来
を自らの手でたぐり寄せようと従したがいて来たものではなかったか。当時のあの気概は、どこへ行って
しまったのか……。

鵜野は廂ひさしの端近に立ち、力ない眼で闇を見つめた。

本当に自分は、大海人への信頼と未来への展望にみちて、ここまで来たのであろうか。今とな

つては、それすらおぼつかない思いがする。

あれは、今から半年ほど前の十月十七日のことであつた。宮中から戻つた大海人の異様な姿に、鶺野は仰天し眼を見張つた。髪を剃り、僧衣をまとつた大海人が、ぬうつと無言で鶺野の前に現れたのだ。

——あなた……。

鶺野は、その異形に眼を奪われたが、瞬時にして、大海人の追いつめられた立場を理解した。

——よかつた……。ともかく、あなたは帰つていらした……。

一晚中の心労から解放され、鶺野は人眼も憚らず大海人にすがりつき、嗚咽した。

「まあ、ここまでは、こうして無事で帰つたよ」

大海人は、鶺野の肩をやさしく搔き抱きながら、出迎えた舍人や女孺達を見やり、ねぎらうように言つた。

「帝は、私に皇位を譲ろうと言われたが、蘇我安麻呂の忠告通り、用心してお断りした。この頃体調がすぐれないし、お譲りになるなら、大友皇子に、と申し上げて、二心ない証拠にご前で僧形になった。この袈裟は、帝からの拝領よ」

「よくそこまで決心なさいましたね。もしあなたが、そこで承諾のお返事をなさっていたら、生きては宮中から出られなかつたかもしれません。父は非情な方ですもの」

鵜野は、涙を拭った。父天智の名を口にする時、鵜野の眼には父に対する愛憎が深く翳った。天智は、その皇太子時代から高い政治理想と果斷な行動力をもって、大化の改新と呼ばれる政治改革を成し遂げた人である。鵜野は、その父を尊敬もし、自分がその血を引く娘であることを、今なお誇りとしている。

天智の弟の大海人皇子は、兄の政治に対する理念をよく理解し、それを現実の政治に根付かせようと、ひたむきな助力を惜しまなかった。改新後の政治の矛盾や綻びを、兄と協力して懸命に繕い、いっぽう、百濟遠征や新羅との戦いに敗れた対外的な痛手を食い止め、兄弟相擁して励ましあい、幾度も政治的危機を乗り越えてきた。

天智は、そんな大海人を、どんなに頼りにし、感謝してきたことか。その氣持を表すために、天智は自分の娘を次々に大海人の妃として与え、お互いの一層の連繫を求めたのであった。

姉の大田皇女に続いて、鵜野讚良皇女が大海人の妃になったのは、十四歳の時である。美しい絹の、長い裾を引く花嫁の衣裳は、幼心にも華やかにうれいものだったことを、鵜野は今も思い浮かべることができる。

「大田も鵜野も、私の血縁の姪であり妃である。こういう深い絆は、ひとしお大事にして、皆仲良く暮らしてゆこうぞ」

大海人は、二人を両腕に抱いて頬ずりをした。鵜野は、大田と眼を見合わせて、くすぐったそ

うに笑い合つた。このあと、大江皇女、新田部皇女にたべも加えられて、四人の姉妹皇女が、大海人の妃になった。

鵜野は、そのことを不思議にも思わず、姉妹一緒に暮らせることがうれしかった。まれに、大海人の最初の妃である額田女王ぬかたのおおきみが、その美しい姿を邸内に見せる時だけは、姉妹に対しては抱かない反感をもつたこともあったが、それが嫉妬の情であると知るには、鵜野はまだ幼すぎた。

天智と大海人の、それほど信頼し合つた関係に、微妙なずれが生じ始めたのは、いつ頃からだったろうか。いや、そのずれに気付くずっと以前に、二人のあいだの亀裂はじょじょにその裂目を深めつつあったのかもしれない。

それまで皇女ばかりだった天智に、皇子大友が誕生した。そのことが、骨肉の争いの始点だったといえようか。

賢明な兄弟であっても、その愛は、しよせん親子の情には及ばないのかと、鵜野は歎息した。「お父さまは間違っています。一度は皇嗣と決めたあなたを、いくら自分の子が可愛いからといって、大友に代えようなんて、理性的なお父さまとは思えないなさり方だわ」

天智が大友皇子を太政大臣に任じた時、鵜野は初めて、はっきりと父に敵意を抱いた。当時、太政大臣は、次の皇嗣である意味を含んでいたのである。

「仕方がないさ。誰しも自分の子は可愛いからね。絶対的な天皇権力を、最愛の子に継承させた

いと思うのは、当然のことかもしれない」

大海人の茫洋とした表情からは、その本心が掴めなかった。

「あなた、それを本気でおっしゃっているの」

鵜野は、我知らず激して、早口に大海人を詰った。

「子供が可愛い。それは解ります。それと皇位継承とは別のことです。今の国内状況をしっかり把握して、抑えてゆく実力のある人は、あなた以外にはありません。大友のような青二才に、どうして困難な現状を治めてゆくことができるのでしょうか。それに大友の母は伊賀采女で、卑母からの出生ですから、帝位に即く条件に欠けています」

「しかし、帝は、すでにそう決められたのだ。それになんのかのといっても、大友皇子はいい青年だよ」

大海人は、鵜野のなだめ役にまわったように、むしろおだやかに言った。

「文武共にすぐれた偉丈夫だし、私にとっても、十市姫の夫だから娘婿だ。憎いわけではない」

「ええ、確かに大友は、立派に成長しました。私にとっては弟だし、いい青年には違いないわ。でもそれは、あくまでも私的なことです。天皇というのは、この新しい出来たての中央集権制度の上では、絶対的なものです。その皇位に、一度皇嗣と決めた人を無視して、大友を、というのは、お父さま自ら帝の尊厳を冒し、政道の誤りを冒すことにもなりますよ。そのことが、どう

してお解りにならないのかしら」

「まあ、そう怒るな」

大海人は、苦笑した。

「そういうそなたこそ、父に似て理路整然とはしているが、頑固なものだ」

「笑いごとではありませんよ。大友を挟んで、お父さまとあなたの確執が、深くなっているのは、事実ですもの」

「だが、私は誰とも争いたくはないよ」

「それは誰だって同じです。私など、父と弟、そしてあなたの間に立つ身ですもの。それだからこそ、そんな原因を作り出しているお父さまが憎いのです。私は絶対に、あなたの味方ですわ」

鵜野が、大海人の即位を望む気持には、単に大海人への愛からというより、大海人の即位が既定の事実であったのを、今さらに無視する父への憤りが含まれていた。鵜野は、大海人の漠とした言動の奥底には、実はどれほど深い絶望と怒りが沈んでいるかを察していた。それだけに、子への盲目的愛から、理不尽にも大海人を退けた父が、鵜野には悲しく、恨めしく、帝王としてあるまじき態度に思えて反撥を覚えるのであった。

それが、昨日、大海人は天智の病の急変で呼び出され、帰って来た時には、出家姿だったのである。

「私は、吉野へ隠棲しようと思う。こうして出家して、一切の俗事や政治から離れたとはいっても、私が都にいるかぎり、帝は心安らかではあるまい。吉野の山中で、しばらく坊主修業でもするつもりだ。出発は、早い方がいい。身の回りを整理して、すぐにも発たとうと思う」

前日来の緊張から解放されて、疲労の色濃い大海人だったが、決断は早かった。大海人を取りまく周囲の状況の厳しいらしい様子が察せられた。

「吉野山中で、坊主修業を共にするという者がいれば、従ついてきてくれ。女や子供達はおいてゆく。ただし、草壁くさかべと忍壁おさかべの二人は連れてゆこう」

「私も従いてゆきますよ」

鵜野は、怒ったように言った。おいてゆくといわれた女達の中に、自分も含まれているのは、口惜しく、心外だった。

「僧の修業に女はいらない。それに吉野での生活は、厳しいのだ。そなたに耐えられるものではない」

大海人は、冷たく拒絶した。

「いいえ」

鵜野の眉が上がった。

「私は、あなたの妻ですよ。夫の危機にどうして行動を共にしてはいけないのです？ 私は、ど

んな所へでも従いてゆきますからね。ええ、どこへでも、たとえ地獄だって……」

自分でも思いがけない激しい感情がつきあげてきて、また涙が噴きこぼれた。鵜野はこの時始めて、大海人を自分がどれほど愛しているかを思い知った。

大海人には、天智の皇女四人の他に、有力氏族や豪族出身の女性など、多くの妃があった。その妃達の一人にしかすぎない自分の立場が、勝気な鵜野をひどく苛立たせていた。ことに、正妃であった大田皇女の生存中は、父や夫への不信を心の底に澱ませていた。六年前に、その大田皇女が、ふとしたことでこの世を去ってから、自分が第一の妃になった時、姉の死の悲しみとは裏腹に、頭上の重い被り物がとれたような気分になったのは、確かだった。けれども、鵜野より十歳も年上の大海人は、傍目にはどの妃達にも同じような愛情を示し、自分の家族を大きくその手の中に抱え込んで、慈しんでいるようにみえた。鵜野は、面白くなかった。妃達の間での嫉妬やいざこざは、好ましくはなかったが、正妃となった自分だけには、特別な態度を示して欲しかった。鵜野は不満であり、拗ねてもいた。

だが、今、大海人が皇太弟の地位を追われ、前途の望みも無残にも断たれて、吉野の山に隠棲する他には策もない状況にいるのを悟った瞬間、鵜野はこれまでの自分の意地や気取りや、わだかまりを捨てた。

——大海人が私をどう思っているかというと、私はこの人なしでは生きてゆけない。

大海人への愛情が胸に溢れ、涙は止どめようもなかった。今はもう、むき出しになった自分の真情を、取り繕う余裕はなかった。

——何と言われても、私は従いてゆきますよ。

鵜野は、涙に濡れた眼をひたと大海人に向けた。その眼は、涙のためばかりではなく、その奥にきらきらと輝くものを湛^{たた}えていた。

大海人は、しばらくその眼を見つめていたが、やがてゆっくりと腕を動かして、着馴れぬ僧衣の大きな袖の中に鵜野を包んだ。

「行くか」

鵜野は、泣き笑いに顔を歪^{ゆが}めながら、その袖の中で大きくうなずいた。

大海人と逃避行を共にすれば、それは父との訣別でもあり、父とその子大友皇子の近江朝廷からの離反でもある。それだけに、これからの生活が、陽の当たらぬ辛い日々であろうことは、覚悟しなくてはならなかった。

「あなたは、これから吉野に籠^{かこ}って坊主修業だとおっしゃるけれど、それは口実。本当のお心は……」

鵜野は、大海人に寄りそったまま、その耳に口を寄せて囁いた。

「この危機をどうやって切り抜け、お父さまに取り上げられた政權を、いかにして自分の手に取